

田切ものがたり

天竜川上流右岸の田切地域の歴史的考察

赤羽 篤



深沢川の谷を渡る旧西天竜幹線水路橋 — 箕輪町大出
 (今の水路はサイホンとなり道路橋となっている)



飯田線中田切鉄橋 — 飯島町北河原

一	はじめに	5
	1 一杯ある田切	5
	2 田切地名の分布	5
二	田切という地名	9
	1 文献上の初見	9
	2 田切とは	11
	3 田切の渡り	13
	4 もとになった「田切」	15
三	境界としての田切地形	20
	1 国・郡などの境界	20
	2 荘・郷などの境界	22
	3 文化圏や経済圏などの境	24
四	城館を発達させた中世の田切地形	25
五	交通を遮る田切地形	30
六	おわりに	32
	―― 田切地域の開発に思う	



天竜川上流右岸の田切地形図 (1:50000地形図あかほ・いいた)

一 はじめに

1 一杯ある田切

中央線辰野駅から飯田線の電車は、天竜川右岸の段丘崖を下を南へ走っています。しかし、伊那市街を過ぎて沢渡駅から赤木駅にかけては段丘崖を緩やかに台地上り、宮田村の宮田駅に至ると、もうこのあたりは太田切川の左翼扇状地の真ん中に当たっています。

電車が宮田駅を発してしばらくすると小さな鉄橋を渡ります。この川は小田切川ですが、開析が少ないので電車は掘割を下って太田切川の河原に出ます。長い鉄橋を渡り終えると川端ではありますがそこは大田切駅ではありません。電車は今度は掘割を上って駒ヶ根駅を経て小町屋から伊那福岡駅を通ります。すると今度は深い中田切川の谷を渡らなくてはなりません。電車は谷の北側の斜面を川の上流方向へ河原まで緩やかに下って中田切川の鉄橋を渡り、大きなカーブを描いて今度は北向きの斜面をまた緩やかに段丘面まで上ります。するとそこは飯島町の田切駅であります。

宮田駅からこの間小田切川、太田切川、中田切川、それに大田切駅、田切駅といった具合に田切のつく地名ばかりで、旅の人はもとより地元の人でも数えて見ればその数の多いのにちょっと驚き、一体、田切って何のことかと気付かずにはいられないと思います。

ところがこの近辺にはまだまだ田切のつく地名が沢山あり、今は片桐と書きますが、かの東山道堅錐駅の「堅錐」までもその語源は田切に基づくものと言われています。

2 田切地名の分布

それではこの近辺にはどんな田切地名があるか、飯田線に沿って北から南へ順に拾いあげて見ましょう。

犬田切川 伊那市沢渡

小田切川 宮田村

大田切 宮田村・駒ヶ根市（地名には大）

太田切川 宮田村・駒ヶ根市の境（川名には太、昔は大）

古田切川 駒ヶ根市赤穂

中田切川 駒ヶ根市と飯島町の境

田切 飯島町大字田切

南田切 飯島町田切

田切岳

飯島町与田切川上流オンボ

ロ沢百間ナギの北

与田切川

飯島町飯島と本郷との境

片桐

中川村片桐

こうして見ますと駒ヶ根市近辺だけでもこんなに多くの田切地名が見られますが、伊那谷以外の地方ではどうかと探してみますと、次のように他所にも沢山見られます。『大日本地名辞書』『信濃史料』『長野県の地名』『新潟県の地名』

◎長野市西部の犀川の左岸一帯は中世には小田切（おたぎり）氏の本拠といわ

れる小田切の里があり、戦後まで小田切村もありましたが昭和二十九年に長野市に合併して今は小田切ダムとか小田切園などの名に

名残が見られます。

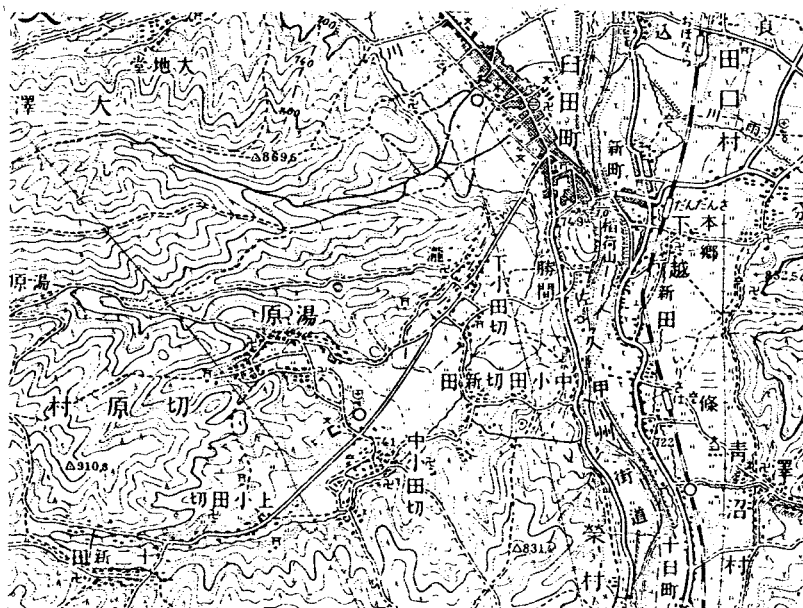
◎南佐久郡白田町の片貝川の上流には上小田切、中小田切、中小田切新田、下小田切等の集落があり、昔は佐久の小田切（おたぎり）の里といわれ滋野氏の支族の小田切氏の根拠地としても知られていました。



上水内郡小田切村（昭和12年印刷 1:50000地形図長野）

また地図を見ますと、北佐久郡望月町の八丁地川の上流には浅田切などの地名も見られます。

◎浅間山の噴火によって出来た南斜面の広い裾野、例えば北佐久郡御代田町南部には、厚い火山灰層が沢川の流れで浸食して平坦な谷が大小数多く発達して佐久平へと続いています。この谷底の平地は水利もよく水田に開発さ



南佐久郡切原村（昭和8年印刷 1:50000地形図小諸）

れています。特に地名として田切とは呼ばれてはいないようですが、この地形がいわゆる田切地形としてよく例にあげられています。しかし伊那谷の田切地形とは成因が少し違うかと思われます。

◎長野市から北國街道（現国道18号線）を野尻湖から県境の関川を渡って新潟県中頸城郡妙高高原町に入りますと、西方から流れ出る白田切川が関川に合流しています。白田切橋を渡ると対岸は北國街道の田切宿、さらに西からの郷田切川を渡って下ると今度は大田切川に出会い、幾つもの田切地名に驚きます。

妙高山（二四五・九㍎）から流れ出す田切の付く名前の川は何れも関川に注いでいますが、噴火の堆積物で覆われた地層はもろく、川はV字谷を形成し、この地形をここでも田切とよんでいます。

集落は関川の左岸に発達し、北國街道が南から関川、田切、関山へと通じていますが、昔はさすがに田切は北國街道屈指の難所で特に冬は豪雪が積もり、南に小田切坂、北には大田切坂があり、関の山の嶮といわれ宿場間の距離もわずか一里半前後であったといえます。

元龜三年（一五七二）十月、甲斐の武田父子はここ田切辺まで進出して上杉謙信に対抗したといえますし、ま

た天正十年（一五八二）四月、織田信長の将森長可は信濃の海津城より大軍を率いて越後に迫ったので景勝は本誓寺に命じて越後の諸寺院を動員して大田切城に立て籠もってこれを防いだとも伝えられています。

この大田切城跡は田切の南方といわれていますが、田切地形の発達したこの地方は一帯が要害の地で、しかも信濃松代より約十里、また北の春日山からもやはり十里の位置にあり、古来信越争乱の前哨戦の地だったといえます。

以上管見ではありますが、他地方にも田切があることに一層興味を引かれることと思います。しかしそれにしても田切の多いのは上伊那地方の天竜川右岸であります。それ故田切について、その地名のいわれやその地域について考えてみることはこの地方に住む者として大変意義あることと思われまので、ここでは田切地域に関して歴史的考察を中心に述べて見たいと思います。

なお本稿は、雑誌『信濃』第四九卷第三号通巻五六七号所載の拙稿「田切地域についての歴史的考察——長野県上伊那地方天竜川右岸の場合——」を補筆改編したものであることをお断りしておきます。

二 田切という地名

1 文献上の初見

それではこの田切という地名が文献の上ではいつ頃から見えるか、述べて見ましょう。

鎌倉幕府によって編纂された歴史の本として有名な『吾妻鏡』があります。この本の初めの方の治承四年（一一八〇）九月十日の記事に、概略次のような話が載っています。

源頼朝は源氏再興のために平氏を倒そうと伊豆で旗揚げをしました。しかし石橋山で早くも敗れてしまいました。これを聞いた甲斐源氏の武田信義や一条忠頼等は直ぐに応援に駆けつけようとなりました。すると頼朝は、彼らに先ず信濃に散在する平氏の残党を討伐するように命じました。そこで武田氏等は甲斐から先ず諏訪へ兵を進めました。たまたま諏訪上社の近所で野営をしていますと、その夜中に大祝から諏訪大明神のお告げを受け、それに励まされて出陣し「伊那郡大田切郷の城」に立て籠もる「平氏の方人の菅冠者」をたちまちにして滅ぼすこ

龍劉平氏方人官冠者伊那郡大田切郷之城冠
者因之未戰放火共錦自焚之間各陣于根上河
原相議云去夜有祝夢想今思官冠者滅亡預明
神之罰欤然者奉寄附田園共兩社進可申事由
共前武衛欤者皆不及異儀君執筆今書寄進款
上宮分當國平出宮所兩郷也下宮分龍市一郷
也而筆者誤書加罪仁谷郷此名字衆人未覺稱
恰不可然由再三錄今書改每度戰兩郷名字之
間任其旨訖相尋古老之廢字罪仁谷之所在之
者信義宗廟寺城堂上下宮不可有勝劣之神應
已揚焉路催強賊信峠敬礼拜其後共平家有志
之由夙因之輩者多以糾斷云
十一日 庚申 武衛巡見安房國丸御厨給九
五郎信俊為赤内者候御共當所者御景祖豫州
神門平東夷給之昔最初朝見也在地底合諸廷
尉神門御謀給時又寂初之也而為被祈申武
衛御拜進事以御敷地去年治元年六月一日奉
寄 伊勢太神宮給果而同廿八日補藏人給而

『吾妻鏡』治承4年9月10日の項（右）（内閣文庫所蔵 北条本）

とができたというのであります。

この物語はまだ後が続いていますが、この事
件に関してはこの本以外に関係史料が何も無く
て詳細を知ることができません。ここに書かれ
ている「伊那郡大田切郷之城」という「大田切
郷」という郷名の使用についても他には例が見
られませんが、現在の駒ヶ根市と上伊那郡宮田
村の境となっている太田切川は昔は「大田切
川」と書かれていて他の古史料にも散見する歴
史の古い川でありますので、大田切郷というの
はこの太田切川の流域をさして呼んだのではな
いかと考えられます。それでは「大田切郷の
城」というのは何処であったかといっても、こ
れについても分かりません。いろいろな説があ
りますが今までのところ一応太田切川中流右岸
の北割の河畔に見られる城跡ではないかと言わ
れています。

しかし、この太田切川河畔では城館の規模は
小さく、地理的關係もよくなく、むしろその南
に並行して流れる鼠川下流の赤須城跡辺りでは
ないかともいわれています。

ただはつきりと言えることは、『吾妻鏡』に見えるこの「大田切郷」の「大田切」という地名が大田切や田切の文献上の初見であるということです。

そして前述のようにこの太田切川を中心にして北や南の地域にいろいろな冠辞のついた田切地名が散見するところを見ると、これらの地名は田切という何か元になる地形の単位があって、それに関連してふさわしい名前がそれぞれにつけられて何々田切と呼ばれるようになったものと考えられます。

2 田切とは

では各地にこんなに多く分布している地名の田切とは一体どういう意味があるのでしょうか。そういうと直ぐに田の字にとらわれて田圃に関係づけて考えられがちであります。現に、先にあげた南佐久郡臼田町の小田切にはこんな伝説もあるようです。

上小田切の地蔵池が、ある年大水のために壊れた。そのとき池の中から一つの臼が流れ出た。臼は小さい田を突っ切って流れ、ついに今の臼田の田の中に止まった。臼が小さい田をつきつたことから、小田切の名が出た

のだという。また臼が止まったところから臼田という名も出たという。『臼田町の文化財』

しかし、どうも田圃の「田」には関係なく、水が突っ切って流れるその流れ方の「たぎる」が語源で、たぎるとは「水が激しく流れること、たぎり落ちる急流のこと」のようであります。

ところで、伊那谷の中部で木曽山脈の東山麓に発達した中田切川と与田切川の扇状地の上に立地している上伊那郡飯島町地域はいわゆる田切地形の本場といわれています。そして『飯島町誌上巻』はその地形の成り立ちについて次のように説明しています。

中央アルプスの上昇によって造られた扇状地は、その山麓部を埋め尽くし、天竜川を伊那山脈側に押し付けている。この大型扇状地を造った中田切川や与田切川の現在の姿を見ると、自身で造り上げた扇状地を深く掘り込み、切り立ったがけを巡らして天竜川と合流している。こうして、いわゆる「田切地形」の日本における模式地となっている。飯島町に「田切」の地名が付けられているゆえンである。

背後の高い山地が隆起することによって河川は急流となり、西山からたぎり落ちる水はだんだんと扇状地を浸食し

て深い谷を作っていきます。特に木曾山脈と天竜川との距離が短いので河川は急流となって扇状地を開析して谷や崖を作り、谷底地形を深く広く拡大していきます。こうして出来た地形を「たぎり」と呼び、田切の字が当てられたものと考えられます。したがってもとになるのは山から流れ出す急流で、その川の浸食や堆積、あるいは隆起、そしてまた天竜川の水位の低下などにより田切地形が形成され、それらの田切の規模により大・中・小をつけたり、位置により上・中・下をつけたり、川筋の新旧の時間的変化によって古が付けられたりして、前記のようないろいろの田切地名が生まれたのだと思われます。

でも、それでは犬田切川や与田切川の名は、と問われても困ってしまいますが、田切は急流が扇状地の台地や段丘を「ぶった切る」との意から生まれたことから、犬田切というのは犬が走るように速い流れの意か、また「よた（与駄）」はこの地方の方言で「乱暴のこと」、したがって「よたたぎり」が「よたぎり」となったものか、何れも川の流れの実状と合わせ考えると、そう無理な地名考でもなさそうに思われますがいかがなものでしょうか。

なお古くは東山道信濃十五駅の一つであった「堅錐」あるいは「賢錐」、中世では片切郷の「片切」、現今では中川

村大字片桐の「片桐」など、表記はいろいろありますがこの地名の本場は何処かというところ、一般には中川村の田島と言われています。（篠田徳登「東山道賢錐駅私考」『伊那路』第二二号）

しかし中世には「片切郷」と「田島郷」とがありました。この片切郷は前沢川の下流の左岸一帯だったと考えられます。

この地は西方から天竜川へ流入する荒川の前沢川が田切地形を作り、その谷口へ蛇行する天竜川の本流が東方から真っすぐにぶっつき川口の南側の部分を広く削りとって田島平の氾濫原をつくり、田切地形の北側半分だけが残されているところから「片田切」（かたたぎり）となり、それが「かたぎり」となったものと言われ、それに古来いろいろな字が当てられたものと思われます。この地名考に従えば北は辰野町羽場の北の沢川の出口に始まり規模は大小異なりますが、片田切の地形が所々に見られます。しかし南向きの片田切はさすがに前沢川の出口だけのようではありません。

東山道は南から田島平の西山麓を北上して前沢川を渡り、「堅錐駅」は片桐の中村辺だったのではないかと推定されています。そして片切氏の本拠もまた此処だったのだ

うと言われています。伊那源氏発祥の地と言われる上ノ平（箕輪町南小河内）から為基が此処に移って片切氏の祖となり、やがて田島平の南方に船山城を築いたことになっています。

3 田切の渡し

今から二百十余年ほど昔の江戸時代のことになります。

天明三年（一七八三）五月のことです。三河の民俗学者の菅江真澄という旅人が伊那谷を南から北に旅して綴った『委寧能中路』（伊那の中道）という本を著しています。その中に旅人として渡河した幾つもの田切の地形や渡り方などが細かく書かれていて、当時の田切の様子がよく分かれますのでその一部分を原文のままで次に掲げます。『新編信濃史料叢書 第十巻』信濃史料刊行会

・ よたぎりといふ石ばしるはや川を、女の三人連て、いとやすげに、こしの国と、すが笠に書付けたるを、着てこなたに渡りく、

越え安き浅瀬しら波をしへてよ たぎりながるる

山河の水

・ なかたぎりの川渡り、福岡に至り、

・ 田切々々七たぎりあるわたりの中に、おそろしき川の、おおたぎりといふに至り、岸にたちてうかがへば、水いとふかう、水そこのいしたかう、矢よりも早うながるる音の、なりどよみてけるを、からくして指しわたる、此川やすく渡りうることのかたければ、よきあないをさきにたてて、わたるべき渡りなり、人ごと、かばかりの川よと、をこのふるまひして、ながれしにたるものの、かずをしらず、まいてあめいささかふりても、みかさ、たかうまさりて、わたらんことかたし、今年も旅人ふたり、ところの女もながれうせたるなどかたる、

先に田切の語源についてふれたように、たぎり落ちる水勢や石ころのごろごろした荒川の様子がよく書き表されています。伊那谷の天竜川右岸には特にこうした田切地形が大小幾つとなく並行して形成されていて地形の特徴とされています。しかし、田切とか田切地形などという語は地学や地理学の事典には見えず、論文などでは「いわゆる田切地形」などというような使い方で用いられているので学術用語にはなっていないのでしょう。

田切地形の成因や定義などについて専門的には難しくなりますので今まで述べてきた程度にとどめておきます。伊

那谷の場合は、天竜川の支流が扇状地や段丘を深く広く浸食し、運ばれた土砂は合流点では天竜川に流されて川口近くは沖積平野や氾濫原をなしています。こうして支流に刻まれた台地や崖、斜面や谷底平野、本流への合流点の氾濫原などで形成された田切地形の最も大型のものが太田切川の田切であります。今は太田切川は山麓の谷口からは川底を落しながら南に偏して流れて北側左岸には古い河床台地を残し、そこには大田切の集落を発達させています。そして更に緩やかになった流れは堆積作用でできた河床を残して天竜川へ合流しています。

したがって左翼扇状地に残る小田切川や右翼扇状地に残る古田切川などと合わせ考えるとこの川の流れの歴史は古くて相当に激しかったものと考えられます。

なお田切の荒川や渡りの様子については先に上げた菅江真澄の『伊那の中路』で尽きていると思いますが、その他の資料として次のものを参考に付け加えて置きます。

正保四年信濃国絵図『長野県史近世資料編第九巻付録』

三百五十年ほど前に出来た絵図で現存する信濃国の一番古い地図とされています。大田切・中田切・与田切の三川にはいずれも「水出レバ無通」と注記し



太田切川の中流

てあります。

瀬下敬忠編述『千曲之真砂』宝暦三年（一七五三）

・此間に大田切川といふあり、さまでの大河ならされとも満水の節は大石流れて通る事あたはす、此通り第一の難儀なる川也、常はかち渡りにて石多く水浅し、

・福岡村といふに茶屋あり、それより又坂を下り中田切川といふあり、これも荒川也、満水の節は中々通り難し、大田切川につきて大河也、

・それより与田切川、これも荒川にして、満水の節は通り難し、

島津良介著『甲鑑戦跡紀行』弘化三年（一八四六）

・中田切水漲り橋オチヌ、渡丁ヲ雇テ涉リ、大田切ヲ歴宮田ニ至レリ

4 もとになった「田切」

さて前述のように飯島町は田切地形の本場といわれ、「田切」という所もあります。先に飯田線田切駅をあげておきましたが、その田切の地名のとは何処で、そこはどんな地形のところかという、どうも模式的な地形と地名



中田切川の田切地形を望む（天竜川東岸の吉瀬より）

との関係がはっきりする所もないように思われます。それで飯島町の田切についても少し歴史的考察をしてみたいと思います。

天竜川対岸の吉瀬から中田切川下流の開析平野を眺めますと、下流は大きく北に偏して天竜川へ合流しています。田切地形の模式的な地区として最適であります。

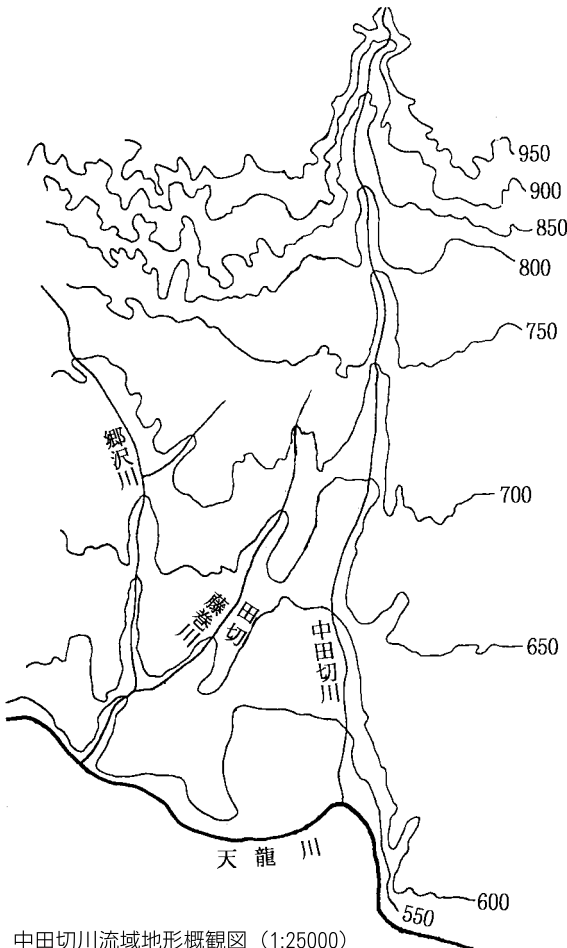
右岸流域にあたる北川原から中平北部にかけての字名を

拾って見ますと、川原・堀端・古川・砂田・石田・島田・中島・堀田・柳田・沖田・芦原田・沼・古瀬など、さすがに田切地域にふさわしい地名ばかりで中田切川の氾濫の跡がしのべれます。

飯田線田切駅のすぐ西にある浄土宗石上山聖徳寺は、もとは北河原にあったのを正徳五年（一七一五）の中田切川の大洪水で流され、享保二年（一七一七）に今の地に再建されたものであります。

氾濫や開析の歴史はそんなに昔のことではなく、今なお生きている田切現象を身近に感ずるわけがありますが、田切という地名は何処にも見えません。

中平を北から南へ越えると藤巻川の谷になります。この川は遠い昔のある時期に中田切川が流れていたその流れの跡であるといわれています。そうするとこの流域の田切地形の方が北川原流域より遙か



中田切川流域地形概観図 (1:25000)



北川原の聖徳寺跡（正徳5年流失）

に古いことになり、もともなった田切はこの藤巻川の流域かと考えられます。

大田切ではなく、ただ「田切」という地名や名字の文献上の初見は「西岸寺文書」であります。本郷の西岸寺は南北朝時代に至鈍和尚等によって再興された歴史の古い寺であります。その時つまり応安六年（一三七三）に定められた規式の中の文書目録を見ますと「田切村」とか「田切之小三郎」「田切神五郎為茂」とかいのように村名や氏人名の田切が幾つも見えます。昔は郷村に起こった氏族はその村名を名乗りました。田切に起こった人々はこのように田切を名乗っていたのであります。

また、やはりその頃書かれた諏訪の「守矢文書」の中に「嘉慶元年丁卯七月九日田切合戦」とあります。これは嘉慶元年（一三八七）の七月、諏訪頼寛が小笠原氏の軍を田切で破ったという戦争の記事の一部分であります。この田切は何処だかはつきりしませんが、諏訪の諏訪氏と下伊那の小笠原氏との戦であり、前後の関係から飯島の田切だったと考えられます。

さらに少し下った応永七年（一四〇〇）の大塔合戦を記した『大塔軍記』という本には「田切五郎七」という侍の名も見えます。

また、話はちょっと変わりますが、現在山梨県中巨摩郡
櫛形町の桜田久雄氏所蔵で同県指定文化財となっている鰐
口があります。鰐口は寺社の本殿正面の軒下に吊るしてそ
れに垂らした布で編んだ紐を参拝者が振り動かしてガラガ
ラ鳴らす円形中空の鐘であります。それに次のように彫り
込まれているのであります。

奉施（入）於大明神之神前 信州伊那飯島郷田切村

永正二年正月日 願主 為清敬白

時は室町時代の永正二年（一五〇五）の正月。諏訪大社
上社の史料によりますと中世の飯島郷は諏訪上社の大宮造
宮寄進の郷村に属していましたので、大明神とは諏訪大明
神のこと、そしてこの鰐口を寄進した社も恐らく田切村に
あった諏訪神社と思われます。願主の為清は飯島郷田切村
の住人で、おそらく田切氏を名乗っていた者と考えられま
す。

さてこのように史料を揃えて見ますと、現飯島町の中世
には田切村があり、その村域は相当に広く、そこに田切氏
を名乗る氏人が栄えていたことが分かります。

この田切氏の本拠は何処であったかよく分かりません
が、『飯島町誌中巻』では飯田線田切駅東方の田切城跡を
あげ、館跡として日方磐神社東方や円通庵東側などの地を



藤巻川の左岸の南割（田切）

上げています。そして遺跡遺物や地名などから古い集落跡の一例として、藤巻川と郷沢川が合流する北側の平坦部をあげています。この北側の南斜面である南割から南田切にかけての一带を歩いてみますと、土地に刻まれた生活のたずまいから古い歴史を秘めた田切はこの藤巻川の流域かと考えられます。

天正十九年（一五九二）の青表紙検地帳には、飯島領は上飯島・石曽根・田切の三か村となっています。その後江戸時代を通じて田切は北川原・中平・南割の三か村に別れていますので、それまでは藤巻川から中田切川までの間をひっくり回って広く田切とっていたことがよく分かります。したがって田切のもとはやはり藤巻川の左岸流域だったこととなります。

話は余計なことになるかも知れませんが、『飯島町誌上巻』によると、この藤巻川の中流は田切の谷を南北に断層が横断していて、地質学的に特色ある地域だそうであります。これは田切とは直接関係のないことで、ついでに触れたまです。しかし、こういう話を聞くと「たぎる」とは、急流が開析作用で台地をぶった切って流れることだけでなく、開析してできた谷を断層が横にぶった切って縦横に崖を造った意味も含まれているのかなあと錯



藤巻川は南に偏して流れて崖下に落ち込んで郷沢川に合流している（南田切）

覚をも覚えます。

藤巻川は下流に行くほど南に偏して流れながら台地を開析しています。そして南割から南田切へかけては平地や南向きのなだらかな斜面を作り、流れは南側の崖下に落ち込んでいます。こうして出来た南向きの傾斜地やその下に続く平坦地は古来絶好の生産や生活の舞台となり、ここが模式的な「たぎり」の本場となったのではないかと考えられます。

こうした地形は郷沢川流域にもあります。それにもかかわらず藤巻川の左岸流域が田切地名のもとになったのは、数ある田切地形の中でもっとも生活の諸条件が揃っていたから早くから開けたと考えられます。そして田切氏がここに起こったのは他所よりは早い時代だったと考えられます。

しかし一般に伊那の氏族の歴史の上では、箕輪町上ノ平に起こった伊那源氏の祖為公の子供の為基が片桐の地に分かれて片桐源八と称して片桐氏の祖となったとされています。そしてこの子孫の活躍が『保元物語』・『平治物語』・『吾妻鏡』などに見られます。

これに比べて田切氏の発祥についてはつまびらかではありませんが、『伊那温知集』という江戸時代の古書では田切

氏を片切氏の類葉としています。そうすると、前述のような田切と片田切の地名考とは矛盾して分からなくなります。致し方なく今後の課題として残したいと思います。

三 境界としての田切地形

1 国・郡などの境界

先に田切の文献上の初見として、大田切之郷について鎌倉時代の『吾妻鏡』を掲げましたが、その後南北朝時代の延文元年（一三五六）に諏訪円忠によって『諏訪大明神絵詞』という諏訪神社の縁起書が造られました。今日諏訪社最古の縁起としてその詞書の写本が残っていますが、この中にも大田切に関する話が出ています。それは概略次のような物語であります。

桓武天皇の時代、延暦二十年（八二〇）に坂上田村丸が勅命を受けて蝦夷の安倍高丸を征伐するために東山道を奥州へ向かいました。たまたま信州伊那郡と諏訪郡の境の大田切という所まで来ました。すると梶の葉の文様のついた水干を着た武士がやって来て蝦夷征伐に連れて

形去天宮、涉り東、素の信なる果、惡の軍、坂の
田村の延、席廿二、二月初、東討、かゝる、一、
奥州、下向、是、則、信、夫、大、相、年、始、之、中、祈、礼、アリ、侍、り、
所、方、乃、神、奉、用、中、一、年、神、之、東、夷、討、か、風、詔、
シ、カ、フ、リ、素、懐、向、神、力、ア、ラ、ズ、賊、抗、神、
鑑、シ、名、下、本、礼、朱、就、下、祈、礼、持、シ、下、依、例、公、
伊、那、郡、魂、方、新、堀、大、田、切、所、三、之、一、路、兵、
希、云、穀、米、鹽、柳、水、旱、シ、キ、寧、相、食、矢、負、
之、下、二、リ、リ、ナ、毎、年、人、下、同、所、南、國、
兵、は、失、リ、素、向、下、兵、若、居、人、ア、タ、
年

行ってくれと頼みました。しきりに頼むので連れて行くと、行く先々で兵を大勢集めては軍勢を整え、その勢いで田村丸は難なく蝦夷を平定することができました。ところがこの人こそ只人ではなく諏訪大明神の化身で、戦勝はこの明神の神徳によるものであったということです。

この縁起書は当時残っていたいろいろの史料に基づいて書かれたもので、この物語の元になったのは宝治三年（一二四九）に諏訪大祝信濃守信重が奉行所へ出した訴状の中に出ています。この文書は「大祝家文書」として今日伝えられています。この史料であるので、絵詞よりは長く書かれていますからここでは重複を避けますが、これには大田切を「大答切」と書いてあります。こうした書き方は他には見られませんが、とにかく平安時代の出来事が物語として文書に書かれて伝えられていた訳であります。

さて『諏訪大明神絵詞』にもどりますと、そこには「信州ニ至リ給シ時伊那郡ト諏訪群（郡）トノ堺ニ大田切ト云所ニテ」とあり、この大田切と言うのは恐らく太田切川のこと、当時太田切川が伊那郡と諏訪郡の境となっていたわけでありましょう。先の大祝家文書にもありますが、古くは諏訪では今の上伊那地方を外の諏訪郡といっています。

た。これは諏訪神社の信仰圏に関する境とも考えられますが、次のことにも関係するかも知れません。

というのは、これより昔の養老五年（七二二）から天平三年（七三一）までの僅か十年間ではありましたが、信濃国から分かれて諏訪国が置かれたことがあります。その時の諏訪国の国境が天竜川右岸ではこの太田切川であったのが、諏訪国が廃されてからもまだそのまま郡境に変わって使われていたのではないかと考えられます。

駒ヶ岳（二九五六・三郎）に源を発した急流が山や麓の台地を大きく開析して天竜川へ合流した太田切川が、そのまま古代においては国境や郡境になっていたもので、自然環境がそのまま支配圏の境界とされ、さらには生活圏の境界となったわけであります。そして近世を通じては北側の宮田村地区は私領高遠領、南側の駒ヶ根市赤穂地区は天領に属し、私領と天領の支配の違いはこの太田切川によって生活圏の境界意識を一層強化したものと考えられます。

2 荘・郷などの境界

次には小型の田切地域の一例として犬田切川以南の伊那市西春近地区について考えてみましょう。

この地方は鎌倉時代においては北条氏の地頭代として小井弓氏がこの地を開発し、伊那郡春近領小井弓二吉郷と呼んで代々相伝した地域であります。今日伝えられている建長三年（一二五二）の小井弓氏所領の譲状三通を見ますと、所領の四至の境には小黒川・戸沢川・犬田切川・藤沢川などの大小の河川をはじめ、境界の目印として洞・沢・滝・崩・溝・池・古川・古堀・島などが数多く見られ、田切地形が自然境界として利用されている特色をよく伺うことができます。鎌倉時代の書き振りで文中分かりにくい所もありますが、田切地形の伺われる部分を譲状の中から拾って見ることにします。（『信濃史料』第四巻）

山小洞の沢の末 南なる沢の末 大戸沢につきつく 山
が洞の崩の先を下り
元の河原の作りの田 南は戸沢の溝の際を北へ芦原池の
中を上りに細田を加へて
上の古堀を大川井の末を下り
北は限小黒川のもと、曲がり尾の先、小木曾、こいろ、
駒ヶ岳のとどまで
大戸沢の深さきりつく、その流れを犬田切のとまで、東
限るふなのしまの田のしり

洪水に押し失われて今は高島と名付けたり その島の際
を南さまに未だ水押の跡見ゆ
古川を下りに行て大川につき、名は犬田切かとに見あて
柳沢の堺は猪の窪の細道、鷹巢を見あつべし 東は藤沢
川をきる水の立とまりまで

ついでに今度は大型の田切地形の一例として、駒ヶ根市
の大田切川右岸の赤須郷における建武二年（一三三五）の
四至堺、つまり四方の境を福岡東福沢文書の「赤須郷本
境」の中から拾って見ることにしましょう。（『上伊那誌歴
史篇』）

北（ノホンサカイ キタウシロ）沢ノツルネヨリ、箱石
ヲ見アテニソロ
東ハ箱石ヨリ、ナキハハノヒクスエヨリ小鍛冶ノマルツ
カヲ見アテニソロ
又北ハ大田切ノ西ノホラサカイ
又南ハ中田切ノ（欠）モロノ木ヲ見アテニソロ
東ハコカチヨリシモハ南ノサカイ天竜トヲリ
これによって中世の赤須郷の大凡の境は、北は大田切
川、東は天竜川、南は中田切川が本境或いは大境とされて
いたことが伺われ、田切地形が地域の境界線としてうまく

利用されていることが理解できると思います。

3 文化圏や経済圏などの境

向山雅重の「伊那谷の方言——太田切川の北と南」(著作集5第一章)という論文の中の「おてんこ・おたま」によりますと、太田切川一本を境にして北の宮田地区と南の赤穂地区とは、方言の違いが顕著であると指摘しています。

その中から一例を次に上げてみましょう。

・北の宮田地区 ・南の赤穂地区

オテンコ オタマ (お手玉)

じゃり イシナゴ (小石)

ガニ カニ (蟹)

ドブ イケ (池)

その他事例はまだありますが、一般に伊那谷の方言研究の上では太田切川が北と南の方言の境界線とされているようであります。

諏訪や上伊那中北部地方では昔は塩のことを「カジカサワ」と言っていたそうであります。江戸時代には太平洋の塩が富士川通船によって駿州岩淵(静岡県)から甲州鰍沢

(山梨県)まで運ばれました。その塩が今度は鰍沢まで出掛けて行った諏訪や伊那の中馬(荷物を運ぶ馬)で運ばれ、諏訪から上伊那北部や峠越しに高遠へと売りさばられました。

毎日の生活に欠くことの出来ない塩だけに、それがついにカジカザワ(鰍沢)とまで呼ばれるようになり、塩気の強弱を「カジカザワが近い」とか「カジカザワが遠い」とまで言うに至ったのであります。『長野日報』平成七年七月十四日「八面観」

ところがこのカジカザワの方言が使われていた地方がやはり太田切川以北の地方で、それは鰍沢からの塩を使っていた地方と一致することになるわけであります。

近世には、伊那谷を南北に走る伊那街道は杖突街道・有賀峠道・岡谷道などの枝道をふくめて、どの道も早くから中馬道として賑わいました。やがて文政六年(一八二三)に至って神子柴村(現南箕輪村)の孫市が新たに天竜川通船を始めようとすると、伊那街道の中馬業者は挙ってこれに反対したことは有名であります。ところがこの時、孫市が中馬業者を説得した文書資料が残っていて、小口珍彦は、これによって次のような論考を発表しています。

『伊那路』第十卷第十号「交通瑣談」

江戸時代伊那へ入った塩の経路は、一つは中馬によって運ばれた三州塩、これは足助で荷を作り替えたので足助塩といわれました。も一つは富士川を上って来たいわゆる鰍沢塩で諏訪から高遠へ運ばれそこで集散したものであります。この両方が大体どこを境としたか、これは従来不明で、三州塩は伊那部辺迄来たのではないくらいに推定されていたにすぎません。それが孫市の書いたやはり通船関係の文書中に実に明瞭に記されています。

孫市は通船に反対する中馬業者に、通船が中馬の邪魔をしないということを述べている中で、「これまで南から中馬の運んで来た塩は赤須限りであった。それで通船はそれまでの塩荷は積まない、通船は赤須以北の塩荷だけを運んで、販売も決して赤須迄ではない」といっているのです。すなわちこれで足助塩と鰍沢塩との境界はやはり昔の伊那と諏訪の境、江戸時代の天領私領の境の太田切川であったことが明快にわかって思いがけない収穫でありました。

こうして太田切川の田切地形は、塩の流通圏の境にもなっていたことを興味深く理解することが出来たと思います。

以上、少し長くなりましたが伊那谷最大の田切地形の太

田切川は古来、政治・経済・文化等さまざまな面で伊那谷南北両圏の境界線あるいは接点をなしていたことが伺えると思います。そして太田切川に限らずこうしたことは他の田切地域においても似たようないろいろな境界現象を捕らえることができるかと思えます。

四 城館を発達させた中世の田切地形

天竜川上流の田切地域における縄文から弥生時代に至る遺跡の分布は、一般に遺跡の数においては山麓地帯や段丘東端部近くに多く、それに比べると中間地帯には少ないようであります。これは台地の中央部が水利に恵まれなかったと思われる。一般に開析谷には遺跡はみられません。開析の時代の古い所では北側の台地の縁部近くの南向きの窪地とか斜面などには遺跡が見られます。谷なりが東西であるので川の流れが南に偏した谷の南向きの斜面などは冬暖かで暮らしよかったためと思われる。

また時代的な傾向でみますと、縄文時代の遺跡の分布が山麓から田切地形にそって段丘東端へと広がり、段丘崖の

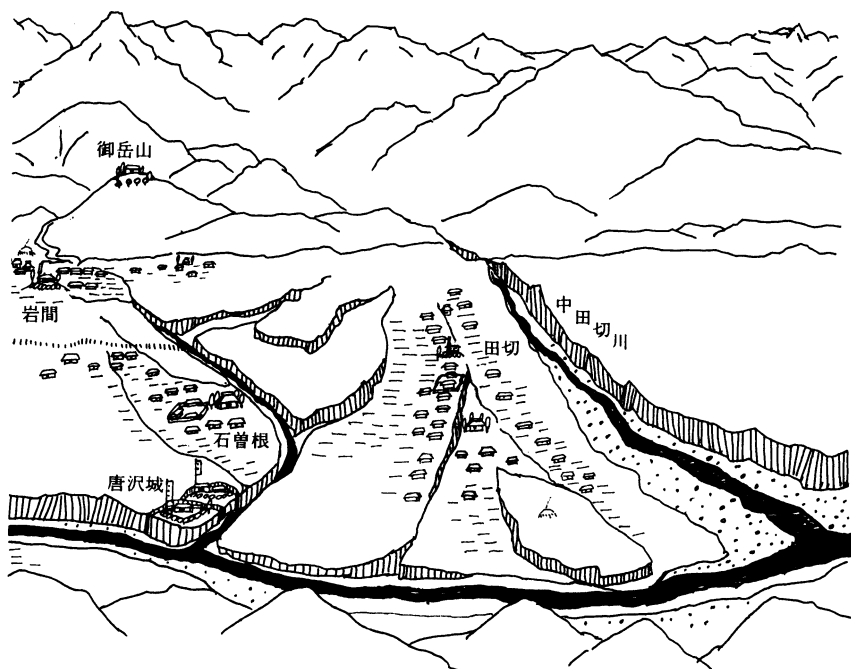
上下付近には弥生時代の遺跡が目立っています。

次に古代から中世にかけての人々の営みを城館跡の分布を通して展望して見ますと、西部山地山麓には山城や狼煙台が点在していますが、段丘の中間地帯では開析谷の縁辺部等を除いては城館跡もやはり少なくなっています。しかし段丘東端部になるとその数は遙かに多く見られます。この段丘東端部というのは言うまでもなく田切地形の谷口近くの一帯になるわけであります。

一例として伊那市西春近地区について北の方から西方山地山麓、中間地、段丘東端の三地区別に城館跡の分布を見ますと、次のようになります。

- ・山地山麓 城平の城 田城 物見や城 町屋城
- ・中間地 小出城 中村城
- ・段丘東端 上島城 村岡城 荒城 フブキ垣外城
- 内城 薬師堂城 丸山城 細窪城
- 沢渡城 恩徳寺城 井の久保城
- 表木城 下牧古城

山麓から東西の水平距離が僅か二キロメートル内外の台地は、大小の河川によって田切地形に刻まれ、いわば田切の多発生地帯で段丘崖上には十余か所の城



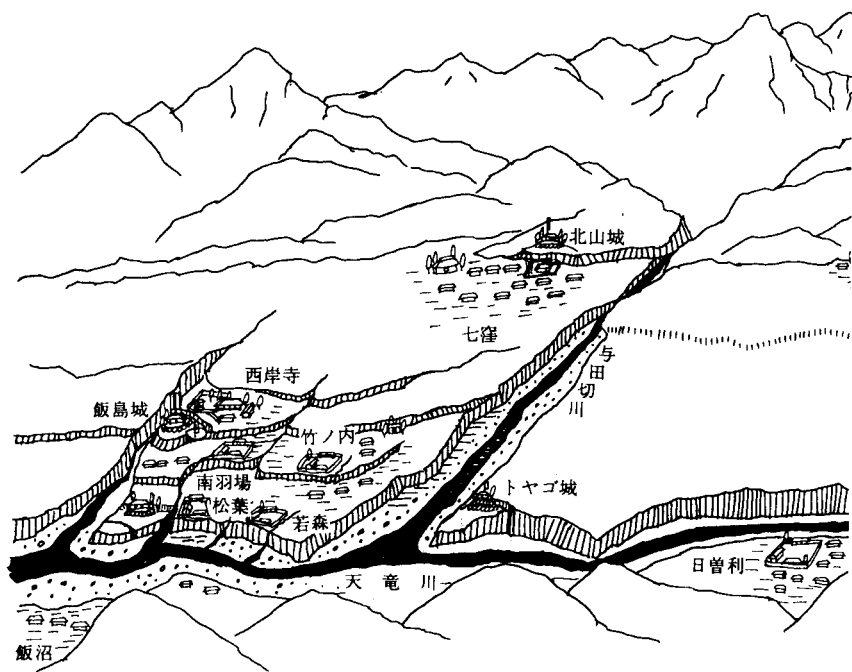
陣馬形山から西方飯島を望む中世のイメージ図（『飯島町誌』より）

館跡が発見されています。

先にも述べましたように鎌倉時代にこの地は信濃国春近領小出二吉郷といわれ、工藤氏の分流が土着して小出氏を名乗って開拓した重代相伝の所領でありました。深く開析された大小の谷川を自然の要害とし、一族は段丘上の所要所に居を構え、農耕は段丘上から次第に崖下の天竜川の氾濫原へと開拓を進めたように、これらについては今日伝わる五通の鎌倉時代の小出文書や発掘調査による遺構や遺物などと合わせて伊那郡春近領小出郷の研究が進められています。

段丘上は、東は崖下に天竜川と沖積平野、南北は深く刻まれた開析谷が幾重にも走り、西には物見の山城等を配して防備には事欠く事なく、田切地形はそのまま城館の立地条件を満たしました。それでも城館の西側にはさらに堀を巡らし、土塁を築いていずれも西側を大手にしています。

小出郷におけるこれらの城館跡群の相互の関係や由緒についてはつまびらかではありませんが、中間地帯にある小出城は小出本城とも言われています。背後に城平の城・田城・物見や城等見張りの山城を配し、段丘上に散在するこれら城館の一族を支配する本城であっ



たとえられ、この地は城館に逃え向きであった田切地形の好例といえます。

次にもう一つの例として『飯島町誌中巻』（一〇〇ページ）所載の絵図を掲げます。原図は飯島町の中田切川から南の与田切川までの地域について天竜川東岸の陣馬形山から西方を鳥瞰したもので、これはそれに中世の城館分布を番号で示したものであります。田切地形が分かりやすく、しかも築城の立地などもよく伺うことができると思えます。なお城館名の番号は次のように筆者が付け加えさせてもらいました。

- | | | | |
|-------|-------------|--------|-------|
| 1 古城 | 2 飯島城 | 3 トヤゴ城 | 4 唐沢城 |
| 5 月誉平 | 6 北島城 | 7 御岳山 | 8 狼煙台 |
| 9 岩間城 | 10 田切城（平林城） | | |

次には宮田村の小田切館と小田切氏について述べてみたいと思います。

小田切川の中流左岸にある「下の段遺跡」が俗に小田切氏の遺跡といわれていますが、はっきりしたことは分からないようであります。宮田村では地名や名字の小田切を「こたぎり」と言っていますが、佐久では「おたぎり」、水内では「おだぎり」と言っています。

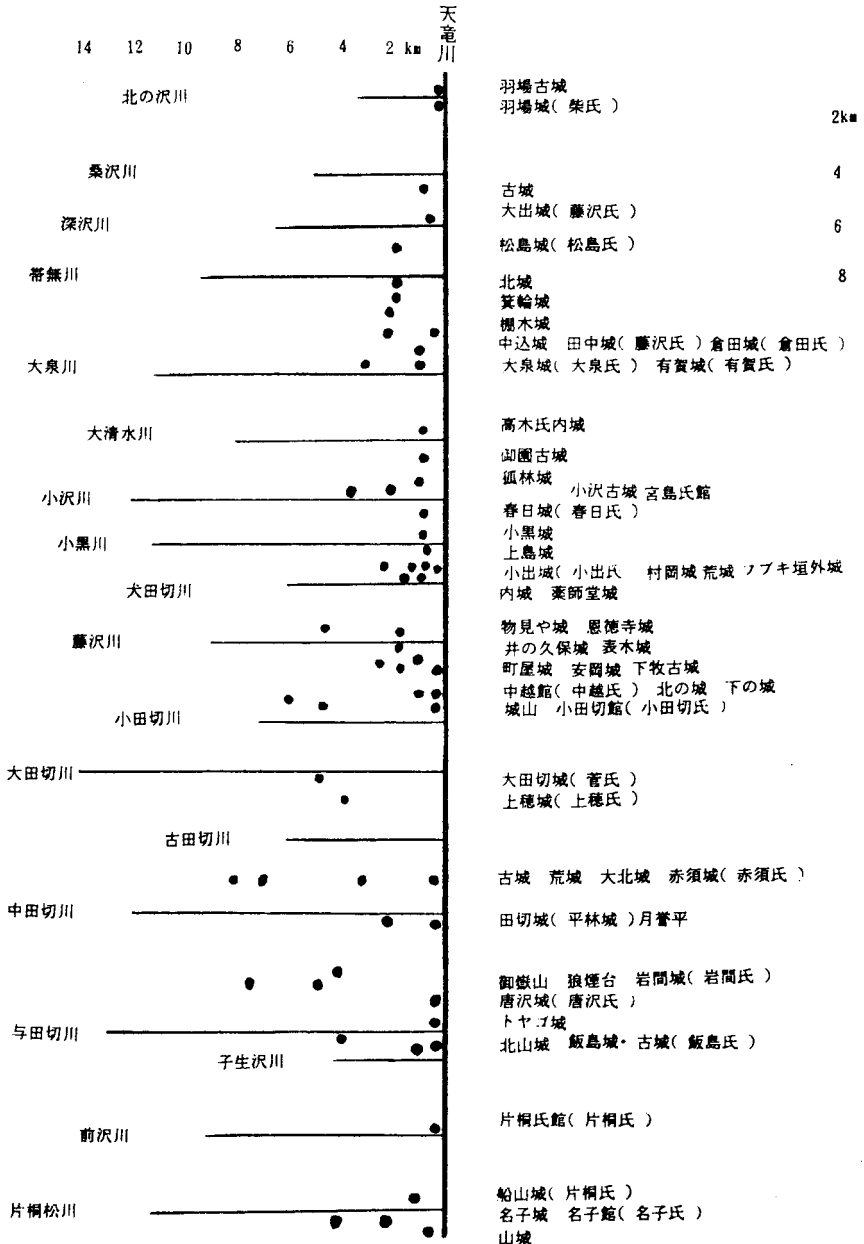
『吾妻鏡』にも小田切太郎・同奥太等の名前が見えますが、小田切をどう読んだか、また果たして信濃の小田切氏であったかどうか分かりません。信濃の小田切氏と思われるのは、永享十二年（一四四〇）の結城合戦の時の信濃守護小笠原政康の陣番帳に見える二人の侍であります。そしてこれ以後小笠原氏の配下にしばしば小田切氏の名が見えて来ます。これらはみな伊那の小田切氏と考えられます。

甲州流軍学書として有名な『甲陽軍鑑』という本によりますと、伊那攻略の歩を進めていた武田信玄は、弘治二年（一五五〇）に最後まで従わなかった伊那侍を成敗したことが書かれています。その伊那侍とは「みぞぐち殿・まつしま殿・くろがうち殿・はぶ殿・こたぎり殿・いなべ殿・とのしま殿・宮田殿」とあります。この中の「こたぎり殿」こそ小田切を本拠とする小田切氏であって、宮田氏をはじめ近在の侍と共に信玄に抵抗していたことが察しられます。

宮田・松島・上穂・伊那部氏等についても詳しいことが分かりませんが、何れも天竜川右岸の田切地形を本拠にして起こった侍たちということができます。

その他の田切地域と城館や諸族についてもまだまだ述べ

天竜川右岸田切流域の城館跡分布の概念図



なくてはなりません、ここでは以上に止めて、次に掲げる「天竜川右岸田切地域の城館跡分布の概念図」をもって総括としてこの項を終わりたいします。

この図は天竜川とこれに注ぐ右岸の主なる支流を北から示し、その流域に散在する主な城館跡を天竜川の川口からの距離に応じて黒点で示したものであります。一般に各支流はそれぞれに大小の田切地形をつくっていますので、その流域の山地山麓・中間地・段丘東端の地区別に城館跡の分布の概要を知ることができると思います。

五 交通を遮る田切地形

伊那谷の田切地形は、田切の川や谷にそった東西交通に比べて、谷や川を横断しようとする南北の交通にとっては古来大きな障壁でありました。

そのため今なお不明な伊那谷を通った東山道の道筋を考える場合にも、大多数多くの田切の谷や川を何処で越したかということが道筋を推定するポイントと考えられます。

天竜川に対して西から肋骨状に発達した田切地形を渡るの

に、川幅の狭くて水量の少ない上流地点を選ぶか、あるいは川幅は広くても水深の浅い天竜川への合流点近くの小川原を選ぶか、その他段丘崖の高低、あるいは平時と雨期など、所々折々の事情によって渡河点は上中下流一様ではなかったわけであります。そしてこの地点の選び方によって東山道の道筋は天竜川に近かったり、遠くなったりしました。

一例をまた伊那市西春近地区に見ることにしましょう。

この地域では西方木曾山脈から流れ出し、天竜川へ流入する河川が、北の小黒川から始まって南の藤沢川に至るまで約八キロメートルの間に大小何本もあります。そしてそれぞれの河川が山麓台地を深く刻んで田切地形をなしています。したがって台地上では南北の往来には一下一上、つまり一度下ってまた上ることを繰り返さなくてはならないので交通路は発達しにくく、伊那街道も段丘崖下の天竜川の氾濫原の西縁部を通り、これを幹線として谷川沿いに段丘上への道が開削されています。そして段丘崖下を走る飯田線にはこの間、北から下島、沢渡、赤木の三駅が今なお存在しています。また南北の交通不便により小学校は明治以降、南北二学区二校制を存続してきています。

明治九年の『長野県町村誌』の西春近村の項には「北に



子生沢を渡る「切通し」 飯島町小平

小黒川を帯び、中央に犬田切川、藤沢川、その外小沢多き故に高低出沒、たとうるものなし。人民耕耘を業とするも労多し。物品運輸の便利悪く云々」と数多い田切地形による地勢の不利不便を歎いています。

一般に台地上で田切地形を渡るには、開析谷の浅い所、つまり段丘崖の低い所を選び、昇降口として先ず「切通し」を作り、そこからつづら折りの道を下り、同じようなつづら折りの道を対岸へ上ります。

参道の町石で有名な光前寺道や羽広道が伊那街道の上穂や坂下からそれぞれ西山山麓の寺に向かって開かれているのは、やはりこうした煩わしさを避けたものと思われる。

車道の場合は上流へ向かって斜めに谷底まで下って川を渡り、今度は逆に斜めに坂道を上ることになります。しかしこの坂には勾配に限度があります。水路が谷を渡る場合は段丘崖を等高線状に曲がって開削されています。こうして各地には何々坂と呼ばれる坂道が今でも残っていて、段丘を上り下りすることの多い生活は伊那谷の特色ある風景の一つかと思われます。しかし土木建設技術の発達と共に田切の横断は、アーチ型の橋を利用した埋め立て道路によってカーブを縮めたり、さらに陸橋あるいは高架橋、水

路は陸橋からサイホンへと代わり、道路も水路も田切の横断は技術的には障害は克服されてきています。

天竜川上流右岸の広い段丘上を灌漑するために、大正から昭和にかけての西天竜幹線水路の完成（一九二八）や田切の交通障害を一挙に克服した中央自動車高速道の開通（一九八四）は田切地域にとって画期的なできごとでありました。

「中央道野越へ山越へ谷越へて国原広くなりたるごとし」とは、伊那谷の中央自動車道を初めて走った車窓での実感でありました。

またつい最近では、上信越道が信州中野から新潟県中郷まで開通したニュースが大きく報道されました。前にふれたように信越県境の関川から北の妙高山麓一帯は田切地形が多く北國街道の一大難所とされて来ましたが今は昔、新聞掲載の航空写真で見ますと、四車線の高速度道路は高架橋で田切ものかは、日本海方面へ向かっています。

こうして田切地形による交通障害は今や道路開発技術によって克服されてきました。しかしそれと共に田切地形の景観はもとより、その地域の人々の生活もまた自ずから変わって行くものと考えられます。

六 おわりに

田切地域の開発に思う

以上は天竜川上流の右岸における田切地形に関して歴史地理的な考察を中心にして縷々述べて来ましたが、田切とか田切地形そのものについては、名前はとにかくとして別に珍しい自然現象ではないと思われれます。伊那節では「東仙丈、西駒ヶ岳、間を流るる天竜川」と歌われていますが、天竜川は東西から大小数多くの支流を集めながらやや東に偏して南流しています。上昇した木曽山脈に発達した複合扇状地には大小幾つもの田切地形が並行して形成されています。この扇状地と河川とその開析によってできた段丘崖と谷底平野とが織り成す田切地形は、自然の造形物として伊那谷の自然の一大特色と言うことができると思えます。しかし、荒川を中心にしたこの地形は、本来人々の生活にとって決して安全で恵まれたことばかりではありませんでした。しかし人々はこの地形を生活の舞台として農耕生活を展開して今日見る特色ある景観を作り上げて来まし

た。

ふだんは静かな谷川であっても一度長雨が続けば田切の荒川は大洪水となって田切現象を再生し、特に天竜川沿岸の村々では天竜川の洪水とともに二重の災害に悩まされた。

古田切川や小田切川が太田切川の本流あるいはその一部として流れた川の歴史は古くて分かりませんが、谷口から北に流れ出た本流は左岸に河床を高く残しながら次第に低く南に偏して流れたでしょう。これによって出来た左岸段丘やそれに沿った河床地帯にもやがて人が住み始めました。田切地形の氾濫原の開発としては早い地域であります。そして江戸時代になると新しい村が出来ました。さらに今日ではそれに続く広い氾濫原は本流両岸の護岸施設によって道路や橋梁を中心にして住宅・農地農園・福祉施設や病院・工場団地・自動車学校等が建設されて田切の谷底平野は見事な近代的な各種団地に開発されています。そうした中で河口近くの河原に群生する赤松の疎林には目を引かれます。

太田切川下流右岸の下平村は太田切川と天竜川との二重の洪水を一手に受けて古来苦しんで来ました。これは洪水除けとして元禄四年（一六九一）に植林に着手して苦勞を

重ねて功を奏した川除林の名残を今に止める松林だそうであります。赤い木肌の緑の松は田切地域開発の歴史を物語るかの様に輝いています。

また開析谷を上って行くとき自然そのままの荒川や段丘崖の風景に反して、段丘上は農地や道路の整備とともに東西に住宅団地や商工業団地、大型店や病院、近くは看護大学などの建設が目立っています。しかし何よりも目立つのは太田切川を渡って南北に開通された広域農道を引っ切りなしに走る自動車の群であります。北は辰野町から幾つもの田切地形をものかは、特に宮田村からは中央自動車道にも劣らず太田切川を渡って一直線に南に走り、沿線には新設された昭和伊南病院があり、広い駐車場は自動車一杯であります。

伊南とは上伊那地方南部の略語で、駒ヶ根市・飯島町・宮田村・中川村等四市町村が共同で行政組合・農協・森林組合・病院などいろいろな事業を営み、民間一般でもこれに準じて伊南地域全域でいろいろな団体が結成されてその実を上げています。こうしたことは何処の地方にも見られる事ではありますが、特に田切地域をもつ伊南地域の自治体においては単なる連合ではなく切実な問題でありました。

こうした実態にたって広域農道は建設されたのであります。例えば中田切川を境としている駒ヶ根市と飯島町は国道一五三号線以外には自動車の往来出来る道はありませんでしたが、この広域農道が開通（平成三年・一九九五）して、中田切川の深い谷で古来隔絶されていた駒ヶ根市大徳原と飯島町春日平とは橋で結ばれたのであります。高さ四二・五メートル、長さ二六七メートルの「中田切ふれあい



中田切ふれあい橋（飯島町より駒ヶ根市側を望む）

橋」は、農産物流通の円滑化と農村の生活環境をよりよいものとすることを目的とした広域農道伊那中部地区（中央アルプス花の道）の一環として建設されたのであります。歩道と親柱には駒ヶ根市と飯島町の市花町花が象られ、地域の人々の努力と協力により中央アルプス花の道の願いは着々と実を結んでいるようであります。

こうして田切地域における交通の障害や狭い生活圏の境界は排除され、地域の近代化は頓に進んではいますが、他方いわゆる開発の波は田切地域の特徴ある景観をも破壊し、喪失している面も少なくありません。そうした所から先般「太田切川流域を考える会」という会が生まれたり、その後太田切川流域だけに限らず、天竜川流域各地に自然環境を守ろうとする運動が高まっていることが報道されています。例えば田切地域にある学校や工場が校地や社地の特色を生かして川や斜面を中心に環境整備に努めたり、雑木林や平地林を生かしたり、あるいは住民や企業グループによる水系の健康

診断とか、あるいは市町村の行政の担当者による環境保全の検討会等々いろいろ起こってきて各地に乱開発を慎み、伊那谷の自然環境を美しく残そうとする運動が生まれてきていることを知り、誠に結構な事と思います。

特に最近では産業廃棄物処理の問題が国民的課題となっており来ますし、さらには地球温暖化防止の問題が世界中の問題となって来ています。

この時に当たり私共は先ず郷土の誇るべき自然をよく見詰め、地域の歴史を考え合わせた将来像のもとに研究や事業を進めて行かなくてはならないと思うこと切であります。

参考文献

- 1 『信濃史料』第3・4・14・15・24・29・30巻
- 2 『長野県町村誌』北・東・南信編
- 3 国土地理院一・二五〇〇地形図 ながの・しなの
なかじょうあかくら・うすだ
- 4 篠田徳登「東山道賢錐駄私考」『伊那路』第二二号
- 5 『新編信濃史料叢書』第10巻
- 6 今井広亀著『諏訪大明神絵詞』九段
- 7 『大日本地名辞書』
- 8 『長野県の地名』
- 9 『上伊那誌』歴史篇四八六頁
- 10 向山雅重「おてんこ・おたま」『伊那』
- 11 『長野日報』平成七年七月十四日「八面観」
- 12 小口珍彦「交通瑣談」『伊那路』第一一六号
- 13 『春近郷を考える』伊那市教育委員会
- 14 『飯島町誌』（歴史編）
- 15 『中田切ふれあい橋の概要』飯島町田切（上伊那地方事務所・駒ヶ根市・飯島町）

赤羽 篤（あかはね あつし）

大正 9 年 上伊那郡川島村（現辰野町）に生まれる。
長野県師範学校を卒業し、県下小中学校に勤務し、かたわら
県・郡・市・町・村誌史等の編纂に関与した。
現在 長野県文化財保護協会理事

田切ものがたり

平成10年 3 月20日 発行

企 画	建 設 省 中 部 地 方 建 設 局	長 野 県 駒 ヶ 根 市 上 穂 南 7 - 10
発 行	天 竜 川 上 流 工 事 事 務 所	〒399-4114 ☎ 0265 - 82 - 3251
著 者	赤 羽 篤	長 野 県 上 伊 那 郡 辰 野 町 渡 戸
		〒399-0400 ☎ 0266 - 47 - 5133
編 集	(株)環境アセスメントセンター	静 岡 市 清 閑 町 13 番 12 号
		〒420-0047 ☎ 0542 - 55 - 3650
印 刷	双 葉 印 刷 (有)	長 野 県 松 本 市 城 東 2 - 2 - 6
		〒390-0807 ☎ 0263 - 32 - 2263

「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

南アルプス、中央アルプスの高峰にはさまれて、伊那谷を北から南へ貫流する天竜川。その流域では、あり余るほどの自然の恩恵に浴して、人々は豊かな暮らしを育んでいます。しかし、名にし負う“暴れ天竜”はひとたび豪雨が見舞えば、日々の穏やかな表情を一変し、猛々しい牙をむき、人々の暮らしを脅かしてきました。

天竜川上流工事事務所では、天竜川が“母なる川”として優しい微笑をたたえ続けて欲しいと願う地域の人々の切なる気持ちに応えるため、半世紀にわたり、地域の人々の多大なご協力のもと自然の脅威と闘いながら河川改修事業や砂防事業に取り組んできました。しかし、まだまだ危険な箇所は多く残されており、絶えず流域の変貌をみつめ、河川管理施設の整備と維持管理を図っていかなければなりません。

また、余暇を求める人々の欲求や環境に対する意識の高まりに伴い、治水、利水の役割だけでなく、貴重な水と緑の空間として人々に潤いを与え、様々な生物の生息・生育環境を形成するものとして、その役割が大きく見直されるとともに、河川が地域の風土と文化を形成する重要な要素であることが再認識され、地域の個性を生かした川づくりが求められています。

そこで、目指すべき21世紀の社会を、災害、水資源、自然環境、地域の個性という四つの視点から「健康で豊かな生活環境と美しい自然環境の調和した安全で個性を育む活力ある社会生活」と位置づけ、洪水や渇水という非日常的現象における被害の軽減対策に加え、日常においても生物などの生息・生育の場であること、散策・スポーツなどの利用の場であること、地域の風土を構成する重要な要素であることを同時に認識し、治水、利水、環境のそれぞれの施策を展開することによる「365日の川づくり」が重要です。

「語りつぐ天竜川」は、こうした考え方に立ち、天竜川に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方々に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立てたいと思い発刊するものです。思い起こせば、昭和61年度の初版を発刊してから早11周年を迎え、今回発刊する2巻を合わせて48巻になります。これも偏に天竜川を愛する地域の方々、その気持ちに応えようとお忙しい中ご協力頂いた執筆者の方々の賜物です。

なお、ご執筆頂いた方々には、自由な立場からお考えを披瀝していただいていますので、建設省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所

所 長 野 田 徹

「語りつぐ天竜川」目録

- | | |
|-----------------------------|--------|
| 1. 伊那谷の気象 | 米山啓一著 |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害 | 北澤秋司著 |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み | 鈴木徳行著 |
| 4. 総合治水の思想 | 上條宏之著 |
| 5. 総合治水と森林と | 中野秀章著 |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷 | 松澤武著 |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷 | 今村真直著 |
| 8. 村境は不思議だ | 平沢清人著 |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷 | 倉沢秀夫著 |
| 10. 諏訪湖の御神渡り | 米山啓一著 |
| 11. 理兵衛堤防 | 下平元護著 |
| 12. 近世 天竜川の治水 ― 伊那郡松島村 ― | 市川脩三著 |
| 13. 川筋の変遷 ― 天竜川と三峰川の場合 ― | 唐沢和雄著 |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性 | 宮崎敏孝著 |
| 15. 天竜川の橋 | 日下部新一著 |
| 16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井 | 北原優美編 |
| 17. 天竜川の魚や虫たち | 橋爪寿門著 |
| 18. 天竜川のホタル | 勝野重美著 |
| 19. 天竜川流域の村々 | 松澤武著 |
| 20. 小渋川水系に生きる ― 人と水と土と木と ― | 中村寿人著 |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防 | 森岡忠一著 |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術 | 吉澤孝和著 |
| 23. 土木技術と生物工学 ― 生きものを扱う技術 ― | 亀山章著 |
| 24. 戦国時代の天竜川 | 笹本正治著 |
| 25. 天竜川の水運 | 日下部新一著 |
| 26. 惣兵衛川除 | 市村咸人著 |
| 27. 紙芝居 開墾堤防 ― 下伊那郡豊丘村伴野 ― | 竹村浪の人著 |
| 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象 | 奥田穰著 |
| 29. 天竜川の淵伝説 ― 『熊谷家伝記』を中心に ― | 笹本正治著 |
| 30. 天竜川の源流地帯 | 赤羽篤著 |

- | | |
|------------------------------|------------------------|
| 31. 東 天 竜 | 三 浦 孝 美 共 著
仁 科 英 明 |
| 32. 天竜河原の開発と石川除 | 塩 沢 仁 治 著 |
| 33. 伊那谷は生きている | 松 島 信 幸 著 |
| 34. 天竜川の災害伝説 | 笹 本 正 治 著 |
| 35. 天竜川の災害年表 | 笹 本 正 治 編 |
| 36. 天竜川水運と樽木 | 村 瀬 典 章 著 |
| 37. 水辺の環境を守る | 桜 井 善 雄 著 |
| 38. 諏訪湖 ― 氾濫の社会史 ― | 北 原 優 美 著 |
| 39. 河川工作物と魚類の生活 | 中 村 一 雄 著 |
| 40. 天竜川上流域の過疎問題 | 山 口 通 之 著 |
| 41. 資料が語る 天竜川大久保番所 | 松 村 義 也 著 |
| 42. 天竜川上流 河辺の植物と植生 | 関 岡 裕 明 著 |
| 43. 水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水 | 藤 森 明 著 |
| 44. 横川山巡覧記 ― 『辰野町資料第87号』より ― | 辰野町教育委員会編
赤 羽 篤 校 訂 |
| 45. 天龍川の鳥たち | 福 与 佐 智 子 著 |
| 46. 遠山川流域の民俗とふるさとイメージの創造 | 浮 葉 正 親 著 |
| | (以上既刊) |
| 47. 田切ものがたり | 赤 羽 篤 著 |
| 48. カエルと暮して | 山 内 祥 子 著 |
| | (発刊中) |